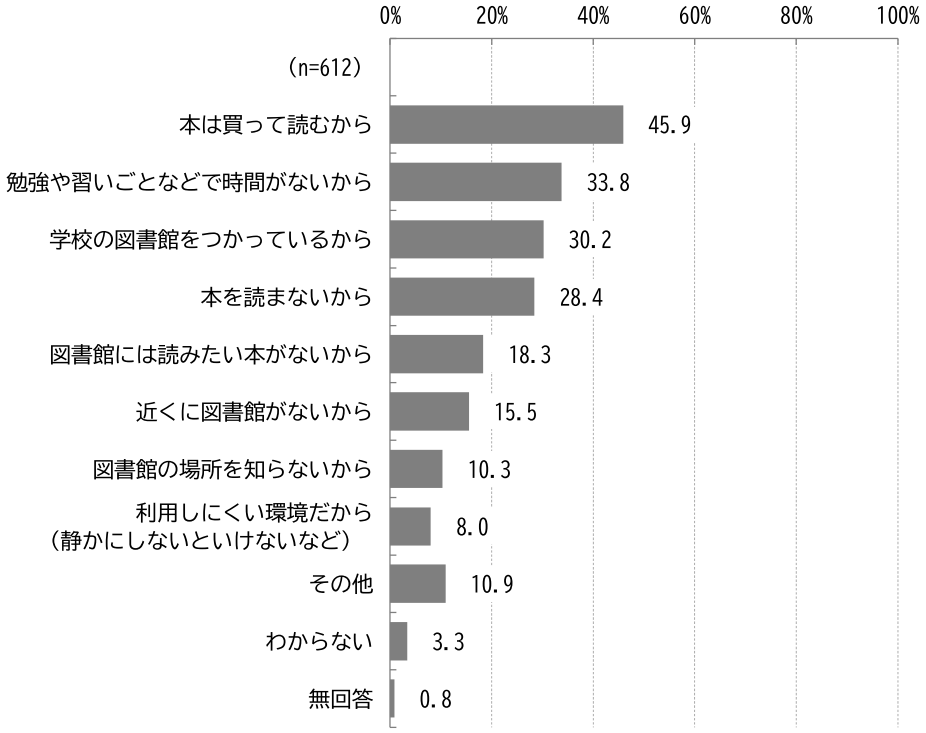
問 11　あなたが地域の図書館に行かなかった理由は何ですか。（○はいくつでも）

この 1 年間で地域の図書館を「利用していない」と回答した 612 人を対象に、地域の図書館に行かなかった理由をきいたところ、「本は買って読むから」（45.9%）が最も高く、次いで「勉強や習いごとなどで時間がないから」が 33.8%、「学校の図書館をつかっているから」が 30.2%となっている（図表２-16）。

図表２-16　地域の図書館に行かなかった理由

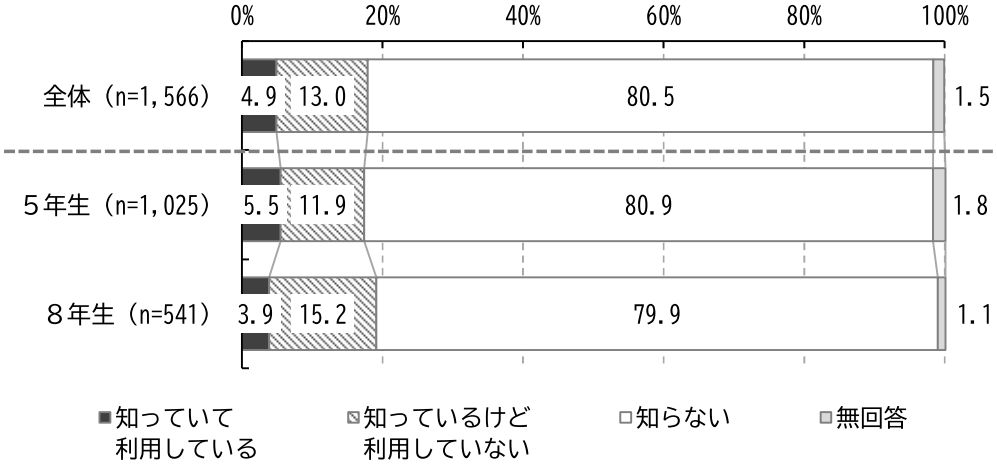


問 12　あなたはしながわ電子図書館を知っていますか。また、利用していますか。
（○は１つ）

しながわ電子図書館の認知率（「知っていて利用している」「知っているけど利用していない」の合計）は 17.9%、利用率（「知っていて利用している」）は 4.9%となっている。

学年別でみると、認知率は５年生では 17.4%、８年生では 19.1%、利用率は５年生では 5.5%、８年生では 3.9%となっている（図表２-17）。

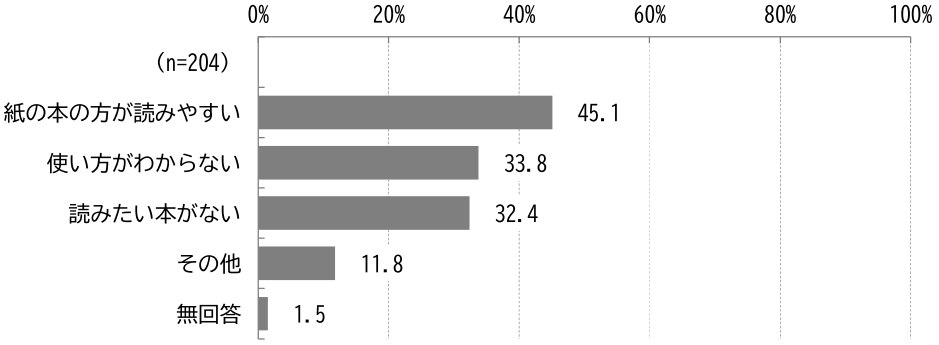
図表２-17　しながわ電子図書館の認知率、利用率



問 13　しながわ電子図書館を「知っているけど利用していない」を選択した方におうかがいします。その理由はなぜですか。（○はいくつでも）

しながわ電子図書館を「知っているけど利用していない」と回答した 204 人を対象に、その理由をきいたところ、「紙の本の方が読みやすい」（45.1%）が最も高く、次いで「使い方がわからない」が 33.8%、「読みたい本がない」が 32.4%となっている（図表２-18）。

図表２-18　しながわ電子図書館を「知っているけど利用していない」理由



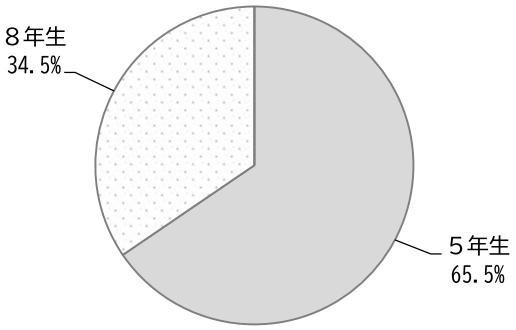
３　回答者の属性について

問 14　あなたの学年をおしえてください。（○は１つ）

学年については、「５年生」が 65.5%、「８年生」が 34.5%となっている（図表２-19）。

図表２-19　学年

（n=1,566）



有識者ヒアリング調査報告書

子どもの読書活動や電子メディア利用に関する知見を持つ有識者等を対象にヒアリング調査を実施し、その結果を分析することで、計画策定における施策検討の資料とする。

1　調査対象者、実施日時

氏名	肩書	実施日時
佐藤毅彦	立正大学文学部特任教授	令和６年７月 23 日 14:00～15:00 ※２名同時に実施
堀純子	立正大学文学部特任教授	
安形輝	亜細亜大学経営学部データサイエンス学科教授	令和６年７月 26 日 10:15～11:00
岡枝理佳	NPO 法人 IWC 国際市民の会理事	令和６年７月 26 日 13:00～13:45
野口武悟	専修大学文学部教授	令和６年７月 30 日 17:30～18:30

2　ヒアリング項目

①中学生・高校生の読書習慣・読書活動の現状について
②中学生・高校生の読書活動を促すため公共図書館が果たすべき役割について
③中学生・高校生の読書環境づくりについて
④障害のある子どもへの図書館サービスについて
⑤外国にルーツのある子どもへの図書館サービスについて
⑥困難を抱えている子どもへの図書館サービスについて
⑦テクノロジーと読書との関係について
⑧次期品川区子ども読書活動推進計画を策定していく際に求められる視点・考え方について
⑨社会全体で子どもの読書活動を進めるために必要なことについて

３　主な発言内容

①中学生・高校生の読書習慣・読書活動の現状について

○中学生と高校生の読書活動については、ずっと不読率が高い。小学校、中学校は、結構、朝の読書が効いていると思う。本当に読書習慣が身についているのかどうかは、これからわかってくる。
○高校生については、忙しいというよりは、学校で無理やり読書させることに抵抗があると思う。高校生は、自分が読みたいと思わないと読まない。正直、短期的なことでは解決できないと思う。
○確かに今の子どもたちは、本自体は読んでいないが、スマホやインターネットで文字情報を受け取る分量は多い。本に限られた読書にすべきなのか。そこに注力すべきなのか。
○本を読むという意味での不読率が高いというのは色々なところで指摘されているが、それを本当に問題視すべきなのかどうか。

②中学生・高校生の読書活動を促すため公共図書館が果たすべき役割について

○主体的な調べ学習、アクティブラーニング（一方的な講義形式の授業ではなく、生徒が能動的に考え学習する教育法）と図書館をつなげることが重要だと思う。区でやる場合は、学校図書館や学校と連携して、モデルにできると良いのではないか。
○調べるときに本が役立つことを体験してもらうことが大切。
○図書館を読書の施設だと思っている人が多い。図書館は色々な機能を持っており、調べることができる場所でもある。音楽配信の契約をしている図書館もあるし、図書館では色々な楽しみができることを、まずは知ってもらうことが重要。
○読書活動というよりは、読書の場を提供するという意味で、図書館が読書環境を整備して、図書館に来ていただきやすい、来ていただけるようなことは、もう少しやることがあるのではないかと思う。
○これは非常に難しく、永遠の悩み。統計上、不読率は５割前後だが、逆に言うと、読んでいる子も５割はいる。なぜ、同じ高校生で、忙しくても読んでいるのか。読んでいない子にどう読ませるのかというよりも、読んでいる子はどう読んでいるのかをもっと知ってもらった方が良いのではないか。
○ティーンズ世代でよく本を読む子や図書館に来る子たちにインタビューをして、事例集を図書館が作って発信したらどうか。ＳＮＳでも良い。本を読んでいる子を、どうやって工夫をして本を読んでいるのかを紹介したら良いと思う。

③中学生・高校生の読書環境づくりについて

○司書の役割は非常に大きい。施設があっても結びつける人がいないと難しい。学校でも先生だけだと、なかなか図書館を使ってもらうようにはならない。
○学校現場で図書館を使い、色々な資料にあたって成果物を作っていくプロセスが、中学校、高校では必要だと思う。そのためには、司書教諭や学校司書の存在が非常に重要になる。先生だけだと、なかなか図書館を使ってもらおうとはならない。
○家庭も大事。結局は大人だと思う。大人が本を読まないと、子どもも本を読まない。感情を豊かにするためには、物語を読むことが重要。そういうものは、大人と一緒に、話題になったものを

読んだり、楽しんだりできるような読書環境があると良い。子どもにだけ「読め、読め」と言っても、読まない。

○大人が本を読むことを面白がっていれば、それだけで子どもは興味を持つ。

○とっかかりは柔らかくて良い。マンガでも良い。

○中高生についていえば、スマホを四六時中握っている。スマホを快適に使える状態をつくることは、中高生を呼び込むことにつながるのではないか。読書に直接結びつかないが、まずは図書館に来ていただくという意味では必要だと思う。

○学校教育との連携で、総合的な学習の時間などで調べ学習がある場合、インターネット上の情報だけではわからないような課題を出す。あわせて図書館で支援をするような講座のようなものを提供する可能性はある。また、ＰＣ環境の充実は必要だと思う。

④障害のある子どもへの図書館サービスについて

○最近のトピックは、読書バリアフリー。視覚障害者だけではなく、ディスレクシア（文字の読み書きに困難を抱える障害）の方等にとっても、デイジー（デジタル録音図書の国際標準規格）図書は非常に有効と言われている。そのあたりをどう取り組んでいくのか。

○視覚障害の方、読書バリアフリーの対象になるような子どもたちにとっては、サピエ図書館（視覚障害者情報総合ネットワーク（サピエ）が行っている点字図書・デイジー図書のデータを提供するサービス）等のサービスをしているところにアクセスできるかどうかが大きな話になる。

○孤立しがちな障害をお持ちの方を、視覚障害の方や読書バリア―フリーを求める人たちのコミュニティにうまくつないであげる役割を果たすところは必要だと思う。

○図書館業界で典型的なものとしては、デイジー図書が有名。それも障害のある方の読書では不可欠。そういう書籍を充実させていく。また、区の図書館だけが提供するのではなく、是非、学校図書館でも使える環境を作っていくことが重要になる。

○区の図書館だと障害者サービスの利用登録が必要だが、子どもの登録に対して保護者が認めない場合もあるので、子どものデイジー図書については、学校経由で使っていただくことが良い。

○区の図書館として、サピエ図書館やみなサーチ（国立国会図書館が提供する、障害のある方が利用しやすい形式の資料を探すことができるサービス）を活用されていると思うので、そういうデータを区の図書館としてダウンロードして学校に提供することは、著作権法上、何も問題はないので、そういう活用の仕方もあると思う。

○学校向けのバリアフリー資料のセットを用意して、セット貸出しているところもある。次期計画の５年間の間に、そういうセットを何セットか用意するとかは、あっても良い。

○読書活動として、子ども向けに読み聞かせやお話し会はやるが、それをインクルーシブ（障害の有無や国籍、年齢、性別などに関係なく、違いを認め合い、共生していくこと）なものにしていくことも重要だと思う。例えば、手話ができるボランティアさんに入っていただき、手話付きのお話し会を開催してみるとか。図書館職員の方たちだけでガムシャラにやるという発想ではなく、手話が得意な区民の方に入ってもらい一緒にできると良い。

⑤外国にルーツのある子どもへの図書館サービスについて

○中途半端に外国語の資料を収集しても、あまり意味がないと思う。切り捨てる訳ではないが、中途半端にやって皆が lose-lose になるくらいなら、どこかに集中して皆が win-win になる方が良い。

○保護者が読書の大切さ、本を読むことの大事さを認識することが重要だと思う。

○本を読むことで、子どもたちの心が非常に成長するということ、小さければ小さいほど、読書または読み聞かせをしてあげることが大事であることを理解してもらうことが重要。

○自分で字が読めるようになっても、一生懸命、文字を追っている段階では、内容はわからない。大人が一緒に読んでもらうことで、本を読むことが楽しいと思うようになれば、次は自分で読むようになる。そこまでのサポートを大切にした方が良い。そういう過程の中で読書習慣を身に着けていくことが大事だと思う。

○子どもが本に慣れていない場合には、保護者を含めてのアプローチが大切。

○大きく２つの観点がある。１つは、多言語資料。その子の第一言語、母国語で読書できる環境をどうつくっていくのか。品川区の実状に合わせて、比較的人口比の多い言語を優先して収集していくことになると思う。また、学校でも指導が必要な外国にルーツを持つ子どもはいるので、学校図書館にも多言語資料を揃えていけると良い。もう１つの視点が、やさしい日本語。資料だけではなく、図書館の館内の利用案内もそうした視点で提供されると良い。

○世田谷区のボランティアグループで多言語絵本の会 RAINBOW という団体が、誰でも利用できるように、日本昔話やよく知られている絵本作品等を多言語翻訳して電子書籍化をしている。そういうところの作品を使わせてもらっても良いのではないか。

⑥困難を抱えている子どもへの図書館サービスについて

○品川区の取組みとしてやっている生活困窮者自立支援事業「学習支援あした塾」の会場に出向いて、図書館がお薦めの本を貸し出すとかしても良いのではないか。

⑦テクノロジーと読書との関係について

○国際子ども図書館で「調べる・学ぶ・読む」というコンテンツを作っており、この中にある「本で調べる東京名所」では学習しながらデジタルコンテンツを見ることができる。昨年リリースされたばかりなので、国際子ども図書館周辺の上野しかない。これの品川版を作ってはどうか。

○国立国会図書館には、ジャパンサーチというコンテンツがある。そこでは、その場で割と簡単に電子展示会を作ることができる。作り方のマニュアルも提供されている。すぐに学校でも取り組んでもらうことができる。中学生、高校生、大学生は、体験しながら学ぶことが好きだと思う。

○調べ学習や歴史研究等で、ネット上では出てない本を調べる時に、国会図書館のデジタルコレクションは非常に貴重な情報源となる。普通の図書館の電子書籍サービスよりは使いにくいが、公共図書館の人が、興味深いタイトルの資料を子どもたちに紹介することはできると思う。

○電子書籍と一口でいうが、図書館向けの電子書籍の話と、一般向けの電子書籍の話は、切り分ける必要がある。電子書籍というキーワードの扱いは難しい。

○生成ＡＩ全盛の時代だからこそ、図書館が重要になると思う。情報の確かさをどうやって見極めるのかという時に、図書館に立ち戻るしかない。「図書館に行こう」「司書にきこう」という流れを作っていくことが重要。学校教育、学校図書館と連携してアピールしていくことが大切。

⑧次期品川区子ども読書活動推進計画を策定していく際に求められる視点・考え方について

○お金は、人にかけていただきたい。人に尽きる。人と人をつなげていくことが大切。
○学校図書館には、人が必要だと思う。
○明確に、これが好きというものを持っている子どもは、本との出会いも早いと思う。子どもたちは、自分の興味のあるものに対しては、情報を探す。そういう興味があるもの、好きなものを引き出してあげることが重要。
○どんなに重い障がいの子どもであったとしても読書ができる環境をどう実現していくのかが重要な視点となる。そのあたりの意識を変えていくというのは、次期計画をどうしていくのかにもつながると思う。
○図書館から接点づくりを行う中で、少しずつ図書館に対する意識を持ってもらうと良い。そういう子どもたちが、安心してくることができる空間づくりという点でも、大きな意味を持つと思う。
○読書推進計画のターゲットは子どもかもしれないが、大人が重要な鍵を握っている。
○次期というよりも、長期的な視点になるが、いずれは「子ども」を取ってしまい、「品川区読書活動推進計画」にしたら良いのではないか。
○読書環境の捉え方として、公共図書館や学校というように既存の枠組みの中で考えてしまうが、もう少し区内にある書店、私立学校等、たくさんある民間事業者を巻き込んで、一緒にできることを方向性として打ち出しても良いのではないか。

⑨社会全体で子どもの読書活動を進めるために必要なことについて

○図書館をどんどん活用してもらうという話と、子どもにどんどん読書してもらうという話しを一緒に考えても良いが、図書館を活用してもらうということでいうと、本を読む場所、勉強する場所という固定観念ではなく、もう少し色々な機能があるということを打ち出しても良いと思う。居心地の良い場所で、たまたま本棚を見たら「面白そうなものがあるな」という発見ができる場所に図書館がなれば良いのではないか。
○情報リテラシーについては、重要性が増していると思う。子どもたちが過度に情報に踊らされないようにしていくことは大切だと思う。
○理想的には、図書館は、信頼できる情報を提供する場であって欲しい。そういう意味では、図書館のスタッフの方が、特定の言説に惑わされることなく、情報の信頼性なり、ある種の評価ができるようにしないといけない。
○興味があること、好きなことを、本につなげていくには、誰かがつなぐ役割を持った方が良い。
○ワクワク、ドキドキ、怖いものを乗り越えていくということも、読書の中にはある。そのときに、一緒にいてくれる大人がいれば乗り越えていかれる。やはり、周りの大人、特に家族は大事だと思う。
○そもそも大人が読まない状況で、子どもに本を読めと言っても読まない。本来は、大人も含めて、読書に親しめる環境づくりを進めるべきだと思う。

〇読書の魅力にあらためて気づいてもらうような機会づくりをどうしていくのかが、一つ重要なポイントとなる。